

8月18日(木) 中学向け 東京会場

残暑厳しい日。あさから30度を超えるなか、今年の会場となった日本大学経済学部7号館の大講義室に、初日は119名の先生方が参集された。

第一講義 野間敏克先生「中学新教科書で教える経済の仕組み①」



名古屋、大阪での講義を基本にして、さらに内容を精選されて話を進められた。基本的内容は、名古屋、補足部分は大阪に記録してあるので参照していただきたい。補足点や変更点：金融に関して時間価値の問題（利子）を説明
消費税5%は逆進性といわれるが、時間価値を考えるとみんな5%分消費税を負担している（この話は逆進性の説明が通常感覚と違うことがある？…金持ち消費は所得の一部、貧乏人は全部消費、だから、金持ちは所得に対して5%分負担していない、貧乏人は所得に対して5%いっぱい負担している→不平等じゃないか、でも、金持ちの貯蓄はいずれにか消費されるし、利子にも消費税かかる。

第二講義 加藤一誠先生「中学新教科書で教える経済の仕組み②」

名古屋での講義をベースとして展開（内容は名古屋の記録を参照していただきたい。）

第三講義 「実践報告：体験型授業の試み」

○李洪俊先生からの提起

大阪から報告された李先生は、以下のような報告、提案をされた。メモを掲載する。
東京と大阪の違いがある…生徒の違い、大阪の生徒はお金をとおして経済を見ている役所（指導要領）はあまり気にしていないが、生徒は変わっていることは事実
1980年代から生徒は変わった（諏訪哲二氏の指摘が実感として納得できる）
コミュニケーション能力はある、正しいことであっても、一方的に教えることは今は、困難となっている

そのため、体験的な授業にチャレンジしている

例：歴史学習での土器づくり、打製石器づくり、釣り針づくり、古代食づくり

実際に作ったら発見することがある

公民でおなじようなことができないか

まずは、人のアイディアを活用するところからはじめた…パクリでもよし（ハンバーガーショップ、お金の貸しかり、100円ショップのビジネスモデルなど）、授業では「盗む」ことは最初に提案した先生から喜ばれる

基本的な流れは、教科書にそってやっている そこに体験的な部分を組み込んでいる

①ハンバーガーショップのケース（藤原和博「世の中科」なども参照）

②消費者の権利と保護のケース

③金融とお金の価値…野間先生が紹介したケース（私の生徒は楽しく授業に参加していた）

④タンザニアの金融のケース（ネタ）…金融制度に失敗、お金を土に埋めている など

次は、自分の興味に関心に…まねで満足できなくなる、そこに工夫がある、開発がある

例：お金の使い道、○サラ金地獄ゲーム、機会費用の考え方など

物価について（○まじめ君となまけもの君）バブル時代のエピソードも話す

仕事について考える（しっかりやっている部分）

租税と福祉（生徒は定率課税を希望するものが7割いる、少々びっくり）

財政と乗数

格差問題 など

教科書を中心にお金を入り口として授業を展開している

○奥田提案（基本的に名古屋、福岡と同じであるが、以下の内容を提案された。メモを掲載する）

大阪狭山市の紹介…生徒は気付いていないけれど、実は地域教材の宝庫（狭山池は日本一古いため池など）

教師が教えたいことと生徒が知っている日常知をつなげるものが「教材ネタ」

ネタの成立する条件…ほとんどの生徒が知っている事実から探す

切実感があるもの、切実感があるものにしていくこと（簡単にはできない、三年間かかってやる、「ようこそ大阪狭山へ」という総合の取り組みは、地域に生徒にひろがっている）

例：アリとキリギリスの話…最後の話、どちらが好き？→福祉→損得で考える

いきなり年金の話をしてもだめ、切実感のあるものにすることができる

新美南吉「手ぶくろを買いに」から

チリの鉱山生き埋め事件（経済の原則がすべてつまっている）

独自開発ネタの例：「回転寿司から考える経済」

会社の研修センターが地元にある

卒業生が店長になっている

帝国書院の公民教科書をベースにして、「住宅会社設立シミュレーション」の発想を加味し、さらに独自の調査を加え教材開発した

利潤をあげるための工夫は？

値下げ競争がはじまったら？（ゲーム理論）ここまで1学期の実践、全体10数時間かけて全体を構想している。

第四時間 情報交換会「中学における経済の授業の進め方」



参加の先生方を6グループに分け、それぞれのグループにコメンテーター（三枝、李、奥田、篠原、加藤、野間）が一人つき、10分ごとにコメンテーターの先生が順番に回り、すべてのグループと情報交換、質疑に答えるという方式で進行した。

グループの先生方内の紹介、情報交換、質疑などが熱心に行われた。

8月19日（金）東京中学2日目

暑さのなかの教室が続くが、88名の先生方の参加で、熱気のある講義が続いた。

第一講義 大杉昭英先生「新学習指導要領にもとづく中学校社会科公民的分野における経済の考え方・教え方」



元文部科学省の視学官で、現在岐阜大学で教鞭をとっている大杉先生の講義である。

大杉先生は、以下四項目に関して、豊富なデータや教材例を提示しながら講義をすすめた。

以下、講義内容のメモを掲載する。

○イントロダクション

壇ふみさんの経験：常に **What do you think?** 聞かれる体験

アメリカでの授業風景：輪になってディスカッションする授業形式

○新教育課程で育てようとする学力とは

知識基盤社会をつくる（中教審答申）…経済の知識も入る

○OECDは知識基盤社会に対応するための「キーコンピテンシー」を育てるとしている

三つの要素で育成する…A異質な集団で交流する（グローバル化に対応、コミュニケーション能力、協働、紛争解決能力）、B自立的に活動する、C相互作用的に道具を用いる（読解力に通じる→経済の知識を用いる）

これは何を表したグラフか？…テキストから情報を取り出す、意味を解釈する、トータルで判断する）

○中学校社会科公民的分野に関する基本的な構成

内容構成を解説

社会を読み解く基本概念の意味と具体例を提示

対立と合意の具体例

効率と公正の具体例

活用すべき経済概念と活用場面を紹介

○確かな学力をはぐくむ経済学習のすすめかた

授業観の転換を進める方法

疑問形に答える学習のテーマ

ツールミン図式の活用 などについて具体的な事例をもとに説明された

第二講義 林敏彦先生講演「日本経済の現状、地震・津波・原発事故を越えて」



昨年 12 月の経済教育ネットワークの総会で講演され、講評を博した。東日本大震災を経た現在をどうとらえ、これからどうすべきかの講演である。内容の概略のメモを掲載するが、講演全体は別に文章化してネットワークHPに掲載予定である。

<自己紹介>

『災害対策全書』に関わった…これ以上のものはないと自負

『大災害の経済学』PHP新書を書いた、関心があればお読みいただきたい。

中学教科書である…この教科書は、執筆者のメッセージがこめられている、これだけは覚えておいて欲しいという内容を渾身の力をこめて書いた本である

日本の教科書の書き方は難しい…アメリカの教科書は生徒が読んで分かるように書かれている、日本の教科書は生徒が読んでわかるように書いてはいけない、教員向けに書いたらよいといわれた、そうしないと先生の出番がなくなる

<災害と日本社会>

東北地方の特殊な話ではない…日本社会の課題が集約的な出ている

ベルギー、ルヴァン大学の災害データ…1900年から災害をトレースしている

災害の定義：死者 10 名以上、被災者が 100 人以上、その国が非常事態宣言をしたかどうか、国際的救援の要請があったかの 4 条件の一つでも満たしていれば災害…原因を特定していない（自然災害、テロ、事件など）

急激な増え方が特徴…地球の使い方の問題、情報化（報告されるかどうか、認知されるか）による

これまでの日本での災害被害の例…関東大震災、被害額GDP比 35%、福井地震、伊勢湾台風（2 年後災害対策基本法ができるほどのインパクトがあった災害）、阪神・淡路大震災、東日本大震災

<東日本大震災を読む>

データの直接被害 32 兆円は林の推定（政府は 26 兆円）

阪神淡路と被害の比較（データプリントあり）

ある新聞社の調査…静岡と神戸の違い、静岡が高い、神戸の低さ（500年はこない、一瞬で死ぬという体験が大きいのでは？）、静岡持ち出し（非常用物品）、神戸（お金と通帳…死ぬときは死ぬで、生き残ったら必要なのは金だけ、そこからどうするかを考えているので関西は銭というわけではない）

危機管理のサイクル（図あり）の説明…危機発生→応急対応→復旧復興（復旧という言葉は私にきらいだ、復旧は可能か？死んだ人は生き返らない、元どおりに戻すことはできない、なぜ復旧を語るか？復興は法律的に定義されていない、だから誰も語らないけれど、被災者の実感は復興なのである）→復興と並行して減災対策（防災というが現実にはできないことをリアルに認識して被害を少なくする、アダプテーションと表現する）→準備・実装→また災害危機発生→

神戸では、復旧に3年プラス2年、いまだ復興には完全になっていない。

日本と欧米の自然観の違いがよく言われてきている…日本人からみればアダプテーションは親和的（人間が適応）、だから防災から減災になる

<復興で大事なこと>

現在は、応急から復興への移行段階…補正予算、復興庁づくりなど

大震災後の経済の動き（データあり：関東大震災後のGDPの変化…直後は減る、その後上昇、日本では世界恐慌に巻き込まれるのでダウン）

今はこれから上昇期になる：現在は、災害ユートピア、災害ユーフォリア、国民がみんな良い人になる、その中で経済も復興、ただしこれは一時的

それを示すもの：兵庫県の実質GRP（データあり）…5年くらいは経済においても、人々の気持ちでも災害ユートピアが継続、問題はその後である

日本経済に示す兵庫県と東北三県のウエイト（データあり）…兵庫は災害後からずーとウエイトを低下させている→問題はウエイトが下がることを見据えて、10年後どういう社会になるかのビジョンができるか否か

ポスト阪神淡路のGDP（データあり）…ウエイトが下がってきている

問題は10年後、20年後地域を担う人間の量と質が問題

ポスト阪神淡路の人口動態（データあり）…災害後「どん」とへる、その後増えるが、地域から出た人は戻ってきていない、一度出てそこで生活ができれば帰ってこない、7割は戻らない、増えたのは新しい人たち

復興で一番大事なのは人口の動き：人口が減ったら復旧しても需要は戻らない、例：阪神電鉄、阪急電鉄がなぜ統合しなければならなかったか

経済でいう需要と供給が大事…いくらお金をかけて施設を作っても、ぴかぴかのゴーストタウンができるだけ（供給が回復しえも、需要が回復しないとダメ）

東日本のケースはこれから…推定では12万人は減っているはず

自分のケース：家族は箕面市に移動した、中学生の子どもが救援グッズをいっぱいもらってきた、近所のスーパーではおまけしてくれた（災害ユートピア）

都市には魅力がある、今回は農村、漁村…ではどんな新しい人がきてくれるのか、きてくれる人はいるのか？まだ誰も言っていない

<日本経済に東日本大震災が突きつけたもの>

災害は問題を突きつけている…高齢化、過疎化、人口が減っている、それを災害が直面していること

では、どうこの大震災を復活させるかこれを考えることが一番大事なのである

これから 50 年間日本の人口は減り続ける（これは確実に予想されている）

世界史的にも、戦争や災害がなく 50 年も人口が減り続けたケースは一度もない

スウェーデンやフランスのケースが出されるが、両国とも人口は減っていない

平和なときに人口が減る国はない

中国も減る、増えるのはアメリカだけ（移民が入ってくるから）

日本で移民を 300 万人受け入れたとすると、家族はその国の生活スタイルに順応→急速に日本人化、少子高齢化、毎年移民を入れることができるか？

日本人が移民と共生できることができるか？ 普通ではできない でも、国家滅亡時にはどうなるかわからないとしても、100 年そんなことができるか

出生率が高いというのが表面的、フランスでは婚外子が半分である

日本では民法はがちがち、テレビでは家族問題をやっている…ライフスタイルが変わるのはそんな簡単ではない

お金を使って子どもを生めといても無理、ワークライフバランスを実現しても、保育所を作ってもダメ、そんなことではない、政策立案者は勉強がたりない

移民を入れようと簡単になりますか？覚悟がありますか？

今の、頭髪指導などは意味がなくなってくる（頭でそう思うが、こころはどうですか？）

ではどうしたらよいか？

いい人だけ来てもらうということとはできない、多様な国になるという心の準備、社会の準備ができますか？

できない…では、減ってゆくことを前提に考えるしかないのでは

<人口減少社会への覚悟を>

3 割減ると、人口密度はイギリス、フランスと同じくらい

経済発展しなければいけないという発想を変える？ ブータンの例があるじゃないかという話もあるじゃないか

ブータンの大臣との対話：何でもできるケータイと電話しかできないケータイ、その違いが GNP と GNH である（ハハー）

ハピネスの研究は世界中で社会学者が取り組んでいる

仕事のある人、健康な人、政治的な参加度が高いと感じている人（ヨーロッパ）

災害と経済に戻る

経済発展している国ほど災害が来ても人は死なない（四川、アチユエ）、豊かなところほど死者の数は死なない

結論は、日本列島にしがみついていたら先細り、出てゆかなければいけない

韓国はその道を選んだ（でも、問題がでて、優秀な人間が出てゆく、国内での失業率が高い、国が二極に分解している）

私は、日本は日本以外の経済発展に何らかの形で関わってゆくことが経済の維持発展に必要だとおもう

国内で必要なのは、地産地消…農業だけではない、福祉などはまさにそれ、エネルギーも

同じ

日本以外と日本という二つの間をどう繋ぐかが問題であるこれは別の課題にしたい
質疑：

Q：地産地消の問題を考える時のキーワードは何か？

A：具体例を話す、神戸は入ってきた歴史がある、P&Gは神戸に学校があったから
今はベトナム人が多い、こういうニューカマーに対する地産地消が必要
国際展開している企業が国内雇用をしっかりとやっている（空洞化の半分）
ソーシャルエンタープライズなどの試みがある そのあたりに希望はある

Q：少子化の最大の理由は何？

A：はっきり言ってよく分からない 制度お金の理由はあるが、もっと大きな変化があるから
だと思う 「ぼんやりとした未来への不安」であるとする、もぐらたたきで解決するの
かどうか？ だったらどうするか？「不安の元」をしっかりと見ること

これから先が見えない 根本原因は先細り経済を読んで感じているのではないかと思ってい
る 回答は簡単なものではないと感じている

大変動（戦争の後など）が起こると、人口は増える

底打ち感はまだきていないのではないか その意味ではこれからの問題である

内容は以上のとおりである。阪神大震災を体験され、その後の復興計画に参画をされた体
験者であり、かつ経済学者である林先生ならではの鋭い問題提起であった。会場の先生方に
感銘と真剣な問いかけをなげた講演であったといえよう。

第三講義 「ニュースと株価の動きで経済を学ぶボードゲーム(ブルサ)の実践」

今回はフルバージョンを実施。参加の先生方は、真剣にかつ楽しくゲームに参加していた。



第四講義 篠原先生担当「歴史を経済の視点で読み解くー江戸時代の経済政策ー」

今夏教室の目玉の一つ、経済を通して学ぶ歴史の中学バージョンの講義である。江戸時代
の三大改革の背景にある財政金融問題に焦点をあわせて講義をされた。以下は、内容のメモ
である。

<はじめに>

入試プロジェクトから歴史と経済に関する関心が広がってきた

高等学校では、高橋財政と戦争に関して語った

中学校では、江戸の三大改革を経済学から説いてみる

結論は、経済の面から理にかなった政策を実施したのは田沼だけ、あとの改革は経済を疲
弊させる政策であった

歴史の「改革」を理解するポイント…なぜ改革が必要とされたのか（改革の背景）、どのような改革がされたのか、改革の効果の三つを押さえる事が必要

歴史の教育は、経済教育よりもストーリー作りが容易

<江戸時代の改革>

江戸時代の改革のポイント…①人口の問題、②税のとり方である

17世紀の百年で人口は急増した…商品経済の発展、様々な産業が興ってきた（塩の製造、酒造、焼き物、絹織物など）、豊かになった、人口が増えた 1750年までに倍増

そのため、政府のなすべきことの規模が拡大→政府の支出は拡大

一方、政府の収入は基本的には年貢（米）→経済発展しても税収入はそれほど増えない

そのため、幕府の財政は、よほどのことがない限り赤字に陥る構造になっていた

政策の大きな柱は、幕府財政赤字の補てんと、御家人旗本の生活基盤をいかに維持するか…しかし米を収入の柱にする仕組みがしがらみになっている

明治になって、経済の仕組みを変え（欧米の経済運営のやり方、生産技術の導入などを取り入れたら）再び経済発展が進み、瞬く間に人口も倍増してゆく

<享保の改革>

享保の改革を考える前提は、正徳の治にある

7代家継の時代 新井白石 間部詮房

背景…荻原重秀による改鋳、出目（シニョリッジ seigniorage）500万両

一時的に幕府財政は改善するものの、やがてインフレになる

貨幣量が増えるとなぜインフレになるかの説明（ものの生産が頭打ちになっているときに貨幣量が増えるとインフレになる）

長崎貿易による金銀の大量流出…天正年間以降、金銀山の開発が進んだため、増産される金銀と海外の品物の交換が増える→慢性的に輸入超過の貿易構造になっていた

<田沼の政治>

田沼の政治

貿易の振興（倭物）、新技術の導入、蝦夷地の開発（失敗）

幕府の備蓄金は綱吉時代に戻る…成功した財政再建

政府の収入を米から貨幣への転換、理にかなった経済政策…生産性をあげる政策と、ケインズに近い景気対策

都市部では繁栄、農村では益の薄い農業、農村の荒廃、都市のスラム化

最終段階での失敗…浅間山噴火、天明の大飢饉、財政維持のために米を大阪で販売、米価高騰、百姓一揆の増加

<寛政の改革>

田沼政治の全面否定 反田沼クーデター

困い米、棄捐令（札差はもう金貸さない）など

七分積み金…明治になって東京のインフラ整備に使われる

松平定信の失脚…尊号一件で失脚（経済政策で失脚したわけではない、後継者は同じ路線をたどる、ますます幕府財政はだめになる）

同時に幕藩改革（財政改革）を実施…成功した藩（薩摩、長州）がある

<天保の改革>

経済学の観点からみれば、「やってはいけない政策」ばかり
水野忠邦はそれでも天保 14 年に改革強行…上知令の失敗
<薩摩藩の改革>

調所広郷の政策の結果、250 万両の蓄えがありそれが討幕軍の軍資金となった
現代日本への教訓がここから浮かび上がるのではないか

補足 地理の産業立地論と関連

(1)江戸時代の大阪でなぜ中の島に集中したのか

(2)スマイルカーブ仮説…生産工程をわけて一番付加価値が安いところに立地する
パソコンの生産の場合（他にも利用できるケースが多い）

自動車はあてはまらない（重いから消費者に近い立地）

東京でも二日間、熱心に講義が展開され、盛況のなかで教室を終了した。

記録とコメント 新井 明